

【問題】（演習）

出典：蘇軾「日喻」没入『經進東坡文集事略』所収／オリジナル問題

書き下し文

南方に沒人多し。日日水と居るや、七歳にして能く涉り、十歳にして能く浮かび、十五にして能く没す。それ没する者、豈に苟に然らんや。必ず將に水の道に得る者有らんとす。日日水と居れば、則ち十五にして其の道を得たり。生まれて水を識らざれば、則ち壯なりと雖も、舟を見てこれを畏る。故に北方の勇者、沒人に問ひて、其の没する所以を求める、其の言をもつてこれを河に試みるに、未だ溺れざる者有らざるなり。故に凡そ学ばずして道を求むることに務むるは、皆北方の没するを学ぶ者なり。

現代語訳

(中国の) 南方には(水に) もぐることのできる人が多い。(彼らは) 每日水を相手に生活していく、七歳で水を歩いて渡ることができ(「=水に足をひたして歩くことができる」)、十歳で水に浮くことができ、十五歳で水にもぐることができ。そもそも水にもぐるといふことは、どうしていい加減でできることだらうか(いい加減ではできない)。きっと「水の道」に(自分なりに) 得ることがあるのだろう。毎日水を相手に生活していると、十五歳で「水の道」を会得することができる。生まれてから水になじんでいなければ、一人前の大人になつても舟を見るところわいと思う(ほど、水が大変苦手になる)。だから(水になじんでいない) 北方の勇気のある人が、もぐることのできる人に尋ねて、もぐる方法を請い求め、その言葉どおりに河で試してみても、溺れない者はいないのである(「=皆溺れてしまうのである」)。だからだいたい(地道に) 学習せず、「道」を求めようと一生懸命になることは、すべて(この) 北方育ちの人々がもぐることを学ぶこと(と同じ) である。

問1 必_ズ 将_ニ 有_{ラント} 得_ル 於 水 之 道_ニ 者_{上。}

問2 生まれてからずっと水になじんでいない者は、一人前の大人になつても、舟を見て恐れるほど水が苦手になる。〔解答例〕

問3 其所以没（本文4行目）

問4 いまだおぼれざるものあらざるなり（「あらざるなり」は「あらず」のままでも可）。

【問題】(自習)

出典：『説苑』／ 岩手大学 99年 改題

書き下し文

景公馬有り。其の圉人之を殺す。公怒り、戈を援りて將に自ら之を擊たんとす。晏子曰く、「此其の罪を知らずして死す。臣請ふ君の爲に之を數め、其の罪を知らしめて之を殺さん」と。公曰く、「諾」と。晏子戈を挙げて之に臨んで曰く、「汝吾君をして馬を以ての故に圉人を殺さしむ。而の罪又死に當る。汝吾君をして馬を以ての故に人を殺し、四隣の諸侯に聞えしむ。汝の罪又死に當る」と。公曰く、「夫子之を釋せ。夫子之を釋せ。吾仁を傷つくること勿れ」と。

現代語訳

(斉の) 景公が馬を持つていた。その馬役人が(誤つて) 馬を殺してしまった。景公は怒り、戈をとつてみずから馬役人を撃ち殺そうとした。(それを見た) 晏子が(進み出て) 言うには、「この馬役人は自分の罪を知らないまま死ぬことになります。私はお願ひします、公に代わって(私が) この馬役人を責め、自分の罪を自覚させてからこの馬役人を殺しましよう」と。景公が言つた、「よからう」と。(そこで) 晏子は戈をとりあげ、馬役人の前に立つて言つた、「お前はわが君主のために馬を養い、殺してしまつた。お前の罪は死にあたる〔死刑に相当する〕」。お前は私の君主に馬を理由に「〔たかが馬を殺したことで〕 馬役人を殺させる。お前の罪はさらに死にあたる。お前は私の君主に馬を理由に人を殺させ、周りの国々の諸侯に(たかが馬のために人を殺したという評判を) 伝えさせる。お前の罪は死にあたる」と。(それを聞いていた) 景公は言つた、「大夫よ、その馬役人を許してやれ。大夫よ、その馬役人を許してやれ。私の仁徳を傷つけないようにしてくれ〔たかが馬のことで人を殺したという悪い評判が立たないようしてくれ〕」と。

問1 ア＝馬 イ＝圉人

問2 而

問3
・王の馬を殺してしまったこと。

・王に馬を殺したという理由で馬役人を殺させること。

・王に馬を殺したという理由で人を殺させ、その評判を四方の国々に伝えさせること。

問4
まさにみづからこれをうたんとす

問5 馬を殺したために馬役人を死刑にするような仁愛の徳に欠ける行為は、君主としてふさわしくないから。 [47字・解答例]

君主には仁徳が必要であり、些細なことで馬役人を殺すと自分が君主としてふさわしくないことになるから。 [49字・別解例]

解説

問1 指示語の指示内容を抜き出す設問。アもイも「之」は「これ」と読んで指示語として用いられている。「これ」という読み方だが、基本的には前にある「人・物・事がら」すべてを指しうる点に注意したい。前の内容から候補をいくつか挙げて比較検討し、念のため代入して読んでみるとよい。

アは、「景公馬有り。其の圉人之を殺す」とあり「圉人（＝馬を飼う役人）」が「殺」してしまったものだから直前の「馬」を答える。

同様にイは、「晏子戈を挙げて之に臨んで曰く、「汝吾君の爲に馬を養ひて之を殺す……」」という文脈なので、「之」＝「汝」＝「圉人」だということになる。「汝」はこれ自体も指示語なので「圉人」の方を答える。なお「これ」と読む指示語には他に「此・斯・焉・諸・是」などがある。

問2 語彙知識の設問。「汝」は問1で見たように「なんぢ」と読んで対等以下の相手を指す二人称代名詞で「おまえ」に相当する。

同様の語は音が似た文字を用いて「汝・女・爾・若・而」などがあるので知識としても記憶しておきたい。文脈上は晏子の言葉が対句表現となつて、似た言い回しを繰り返していることに注目して考える。

問3 指示語の指示内容をまとめる設問。「其」は「それ・その」などと読む指示語である。「」でも「之（=これ）」の場合と同じようには基本的には「人・物・事がら」すべてを指しうる点に注意したい。「其罪」の「其の」は「お前の」という意味で、具体的には「圉人」の犯した罪を指し、具体的には「晏子戈^{ほこ}を挙げて之に臨んで曰く……」以下に「……而の罪死に當る」という形式で列挙されている。それは、①||「吾君の爲に馬を養ひて之を殺す」、②||「吾君をして馬を以ての故に圉人を殺さしむ」、③||「吾君をして馬を以ての故に人を殺し、四隣^{しりん}の諸侯に聞えしむ」なので、それぞれの要点を「……こと」の形で三点にまとめて示せばよい。

問4 書き下しの設問。「すべて平板名で」とあるが、とくに指示の無い場合には古文と同様の歴史的仮名遣いで答える。「將」は「未來の意志・状態」を推量する意を表す再讀文字。必ず「まさに……未然形+んとする」と読み、「今にも……しようとする」といった意味となる。「んとする」「ん」は意志の助動詞「む（漢文では常に「ん」を用いる。「んとする」は古文では通常助動詞「むず（んず）」となる」なので、タ行四段活用の動詞「擊^うつ」をきちんと「擊た」という未然形にすることが大切である。また、「自^じは①「みづから」、②「おのづから」、③「より」と読む多義語だが、ここは景公が怒りの余りに「直接自分の手で殺そうとした」という文脈が妥当なので「みづから」と読む。再讀文字は知らないと読めない。「將・且・未・盍^{こう}・當^{とう}・應^{おう}・須^{しゆ}・宜^{ゆう}・猶^{よう}」などの文字については熟知しておく必要がある。

問5 理由説明の設問。「夫子」は「ふうし」と読んで、「長老・賢者・先生」などの尊称で、ここは齊^{さい}の大夫^{たいふ}であった「晏子」を指す。名臣^{あんし}晏子の賢者ぶりを示すエピソードとして、馬の死程度の些細なことで感情的に処刑をすると、王に対する近隣諸侯の評価を大きく落とすに違いないことを巧みな言辞と演技で悟らせたという逸話であることを押さえる。景公は「大夫よ、その役人を許せ」

と繰り返したあとで、「吾仁^{わがじん}」を傷つくること勿れ（＝私の仁徳をけがさないでくれ）』とあるのが直接の根拠である。「仁」は「仁愛、仁徳、真心、思いやり」といった意味の重要語である。必ずこの語の解釈を交えて、名臣晏子の言動によつて自らの非を悟つたことを「……から。」の形式にまとめる。

【問題】(自題)

《補充問題》

解答

- 問1 ① 時に及んで當に勉励すべし、歲月は人を待たず。
② 王之を行はんと欲せば、則ち盍ぞ其の本に反らざる。

問2 将（且）

※書き下し文……酒を引きて將に（且に）之を飲まんとする。

問3 書き下し文＝③ 置字＝於

※返り点……先_ツ須_ヲ熟_シ讀_ム、使_シ其_ノ言_{ヲシテ}皆_{カラ}若_レ出_{ヅルガ}於_ニ吾_ノ之_一口_{ヨリ}

通釈＝まず是非とも熟読し、その書物の言葉をすべて自分の口から出したものであるかのようにする必要がある。

●
メ
モ
●

【問題】（演習）

出典：『韓非子』外儲説左上 第三十三／早稲田大学・第一文学部・88年・改

書き下し文

曾子の妻市に之く。其の子之に隨ひて泣く。其の母曰はく、女還れ。顧反らば女の爲に彘を殺さんと。市に適きて來るに、曾子彘を捕へて之を殺さんと欲す。妻之を止めて曰はく、特だ嬰兒と與に戯れしのみと。曾子曰はく、嬰兒は與に戯るるに非ざるなり。嬰兒は知有るに非ざるなり。父母を待ちて學ぶ者なり。今子之を欺かば、是れ子に欺くことを教ふるなり。母子を欺き、子にして其の母を信ぜざるは、教へを成す所以に非ざるなり。遂に彘を烹る。

現代語訳

曾子の妻が市場に出かけた。その子供が母のあとを追つて泣いた。（そこで）その母は（子供に）言った、「お前、お戻りなさい。（家に）帰つたらお前のために豚を殺して料理してあげよう」と。（曾子の妻が）市場に行つて帰つてくると、曾子は豚をつかまえて殺そうとした。妻はそれを止めて言った、「（私は）ただ子供相手にふざけ（て言つ）ただけですよ」と。（すると）曾子は言った、「子供は、それを相手にふざけるものではない」「子供を相手に冗談を言うものではない」。子供は知恵があるわけではない。父母（の教え）によつて学んでいく者である。今お前が子供をだましたら、それは子供にだますことを教えることになる。母が子をだまし、子が自分の母を信じないようなことは、教えるということではない」と。そのまま豚を殺して煮たのだった。

問1
(b)

問2 (甲) ゆく
(乙) これに

問3
(イ)

問4
(オ)

問5

(3) (2) 特_ダ與_ニ嬰兒_ト戲_{レシ}耳。 (特_ダ與_ニ嬰兒_ト戲_{レシ}耳。)・(特_ダ與_ニ嬰兒_ト戲_{ルル}耳。)なども可)

非_{ザル}所_ニ以_ニ成_ス教_{ヘラ}也。 (非_{ザル}所_ニ以_ニ成_ス教_{ヘラ}也。)でも可。)

【問題】(自習)

出典：『搜神記』二／お茶の水女子大学・99

書き下し文

嘉興の徐泰、幼くして父母を喪ふ。叔父隗（かづら）之を養ふこと、生みし所より甚だし。隗病（や）み、泰嘗（えいじ）侍すること甚だ勤なり。是の夜三更の中、夢に二人船に乗り箱を持して、泰の床頭（しやうとう）に上り、箱を発き簿書（ぼしょ）を出だし示して曰はく、「汝の叔応（まこと）に死すべし」と。泰即ち夢中に於いて、叩頭祈請す。良久しくして、二人曰はく、「汝の県に同姓名の人有りや否や」と。泰思ひ得て、二人に語りて云ふ、「張隗（ちやうわい）あるも、徐を姓とせず」と。二人云ふ、「亦強逼すべし。汝の能く叔父に事ふるを念へば、當に汝の為に之を活かすべし」と。遂に復た見えず。泰覺むれば、叔の病乃ち差ゆ。

現代語訳

嘉興の徐泰は、子供のころに父母を喪った。（その）叔父の徐隗が徐泰を養（つていたが、その徐泰を養）う様子は、自分の実の子よりも大事にしていた。徐隗が病気になり、徐泰が（徐隗の）傍らで世話をする様子はとても一生懸命だった。ある夜の十二時頃、（徐泰の）夢に一人（の人）が船に乗り、箱を持つて、徐泰の（寝ている）枕元に立ち、（持っていた）箱を開けて（人の寿命を記した）帳簿を出して、（徐泰に）見せて言うには、「お前の叔父はもうすぐ死ぬだろう」と。徐泰はすぐさま夢の中で、（徐隗が死なないようになると）額を下につけて神仏に祈った。（徐泰が祈り続けて）ずいぶん長い間が経つたが、（その様子を見ていた）二人が（徐泰に）言うには、「お前の（住む）*県に（死ぬことになっている序隗と）同姓同名の人がいるかいないか」と。徐泰は思いついで、二人に語つて言うには、「（同じ名の）張隗（という人）がいますが、『徐』を姓としてはいません」「姓は『徐』ではありません」と。（それを聞いた）二人が言うには、「それでは（その張隗に）強要しよう『『張隗を無理やりあの世に連れて行こう』。お前が熱心に叔父に仕えているのを知っているので、（当然）お前（の孝心）に免じて徐隗を生かしておこう』と。（そのままその二人は姿を消し）その後二度と現れなかった。（翌朝）徐泰が目覚めると、叔父の病気はいつの間にか治っていた。

*訳注 県——昔の中国では、県は郡または道・府の下にあり、行政区としては現在の日本の県より小さい。

問1 ①=ひらき ②=いなや (と) ③=つかうるを ④=すなわち

問2 ア=徐泰 イ=（徐）魄

問3 うむところよりはなはだし（うみしところよりはなはだし）

問4 B 同名の張魄という人がいますが、その人は徐という姓ではありません。〔解答例〕

C その後二人は一度と現れなかつた。

〔解答例〕

／その後徐泰は二度と二人を見なかつた。〔別解例〕

解説

問1 字義（読み）の設問で、少々難しいと思われるものも含まれていて。

① 「発」が「箱」という目的語を伴う動詞として機能していること、次に「出簿書（簿書を出だす）」という節が続くことが最初のポイント。「発」が動詞として機能する場合には「はなつ・出発する」「発射」「発進」など。訓読は普通『はつす』、「おこる・おこす」「発生」「発心」など、「ひらく—『発明』『啓発』『発達』など」、「あばく—『发掘』など」といった意味になる。「箱」という目的語と、続く節の内容から考えれば「ひらく」の意味であることは簡単にわかる。

② 「否」の字 자체は難しいものではないが、この場合「有」と並列された述語動詞であることに気付くかどうかがポイント。「有同姓名人否」で、「有A否」の形になつていて。「Aはあるのかないのか（いるのかないのか）」という意味で、「有りや」と並列なので「否」は「いなや」と読む。

③ これもまた「叔父」という補語を伴つた述語動詞であることに注意。述語動詞としての「事」は述語動詞として「問題として処理する・もっぱら～をする—訓読は『こととす』」「つかえる（仕える）—『師事』などの熟語がある。訓読は『つかふ』の意味がある。「叔父」という補語を伴つてるので、「つかふ」のほうだが、「事叔父（叔父に事ふ）」が「念ふ（おもふ）」の目的語で

あることも忘れてはならない。設問には「送り仮名も含めて」とあるので、下二段活用「つかふ」の連体形に格助詞「を」を接続させた「つかふるを」が正解。

- ④ 「乃」は基本。直後に「差ゆ（いや）」という述語動詞があり、位置的に副詞と判断できる点から「すなはち」と訓読する。なお、「乃」「即」「則」「便」など、「すなはち」と訓読する字の意味の違いも辞書で調べておくこと。

問2 ア・イそれぞれが述語「養」「活」に対する目的語であることに気付けば簡単な問題。アは主語「隗（徐隗）」が何を「養う」のか、と考えれば、「養」の対象は、幼児期に父母を喪った徐泰であると判断できる。同様にイも主語「二人」が何を「活かす」のか、と考える。徐泰のところに叔父徐隗の死を告げに来た「二人」は「簿書（注を参照）。この場合は人の寿命を記した文書」を携えている点からも「あの世からの使者」のようなもので、その二人が叔父の延命を祈る徐泰に叔父と「同姓名の人」がいないか、と尋ね、徐泰が「張隗という人がいる」と答え、それを聞いた「二人」が「亦可強逼（これも注参照）。強引に連れて行こう、の意」と言って「活か」そうとする対象は誰か。普通に読めれば「張隗」という人を徐隗の身替わりとしてあの世に連れて行つて、徐隗を死なせないようにしよう、ということと考えられる。

問3 訓読の際は、どの語が述語動詞であるかを見極めるのが第一のポイント。この場合、返り点が付されているので、それを参考にすれば「甚」が述語動詞であると判断できよう。すると「於所生」が述語動詞「甚」に対する目的語・補語の位置にあることになる。「於」は述語動詞「甚」の直後になり、いわゆる置き字。訓読の際には読まないことになるが、この字によって後の名詞（句）「所生」が補語であることがわかる。「所生」の部分は注に示された意味と、返り点から「生む所（生みし所）」と訓読することになるが、「所」という字が続く動詞（句）を「～（する）所」と「名詞化」する機能を持つていてることも知つておきたい。あとは訓読しない「於」の示す意味（どういう補語か）がわかれれば問題なく訓読できる。「於」には「（動作の行われる）場所」「（動作の）起点」「（動作の）原因」「受身の実際の動作主」「比較の対象」などの意味がある。傍線部では前後の文脈（この場合は、「甚」という述語が直前の「養之一之を養ふこと」を主語としているということ）を前提に「甚」という述語動詞と「所生」という補語の関係から判断する。簡単に言えば、「叔父の徐隗が徐泰を養うこと」がどのように「甚し」なのか、と考えれば、「所生（実の子）を養うこと」と「徐泰を養うこと」の比較であると判断するのが妥当。したがって補語「生む（生みし）所」の後に

「より（よりも）」という格助詞を補つて「生む所より甚だし」となる。

問4

B 傍線部が徐泰の会話文で、直前の「二人」の「汝県有同姓名人否（お前の県に徐隗と同姓同名の人はいないか）」という質問に対する答えである点を前提に考える。すると傍線部の「張隗」というのは「隗」が共通する点から人名（質問にあつた「同姓名人」）であることがわかる。そして「不姓徐」の部分は「徐隗」と「張隗」という人名から考えても「（名は同じだが）姓が違う」ぐらいの意味であることも容易に理解できるだろう。ただし、設問で「訳」を要求されたときは原則として「直訳」をすべきなので、「不姓徐」の構文をチェックする必要がある。述語動詞は「不」に返読する点から考えても「姓」。「徐」は述語動詞の後なので目的語・補語ということになる。

「姓」は日本語の感覺では名詞であつて、単独では述語動詞（用言）とならないが、漢文では元来品詞という概念がないので、日本語では名詞でしかないものが述語動詞として機能している場合も珍しくない。そのような場合、一般に①断定の助動詞を用いて「形容動詞」の形にして述語として訓読する、②サ変動詞「す」を接続させて「名詞（漢語）+す」の複合動詞として訓読する、の二つの方法がある。この場合は①の「形容動詞」の形にすると、「不姓」は「姓ならず」という形になり、構文上目的語・補語であるはずの「徐」を主語として訓読しないと意味が通じなくなるので、②のサ変動詞のほうを探る。その際に、「姓す」では日本語として意味を成さない表現になることに注意。「徐」という目的語・補語を伴つてある点、「姓は徐ではない」というぐらいの意味である点から格助詞「と」を入れて「姓とす」とする。「不姓徐」の部分の訓読は「徐を姓とせず」となり、直訳は「徐を姓としていない」。したがつて「姓は徐ではない」ぐらいの訳に辿りつけるだろう。あとは「張隗」という部分とどのようにつなげるかだが、普通に考えて「（同名の人は）張隗がいるけれど、姓は徐ではない」と逆接の関係になることはわかるはず。設問に「わかりやすく」という指示があるので、「徐隗」と「張隗」の名が同じであること、「徐」と「張」で姓が違うことはつきりわかるように答えをまとめればよい。

C 述語動詞は「見」だが、「不復」がこの部分のポイント。述語動詞の前に位置しているので「不」は（もちろん）否定詞、「復」が副詞ということになる。「復」は「再び」ぐらいの意味だが、これと「不」の組み合わせは語順によつて意味が異なるので注意

したい。「不復」で「一度と再びしない（つまり少なくとも一度はした）」という意味になるのに対し、「復不」の形だつたら「今回も再びしない（つまり以前もしたことがない）」という意味になる。これを知つていれば難しい問題ではない。「遂」は「ついに・結局」。あとは「見」の主語だが、これは「徐泰」と考えても意味は通じるし、「二人」でもおかしくない。結論から言えばどちらでとらえてもよい。ただ、どちらが主語であるかによつて動詞「見」の訓読が違う——日本語として使う動詞が違う——点は注意しておこう。徐泰が主語の場合は「（二人を）見す」となり、「二人」が主語の場合は「（徐泰の前に）見えず・現れず」となる。

《補充問題》

解答

問1 ① 訓点=食不_{レバ}飽_カ、力不_ル足_ラ也。

通釈=食べ物が十分でないのでも、力が足りないのである。

② 訓点=子無_二敢_{カレハテ}食_{ラコトヲ}我_ヲ也。

通釈=あなたは決して私を食べてはならない。

問2

① 汝云ふこと有りと雖も、以て疑はざるなり。

② 敢へて吾の汝に問ひし所を告ぐる無かれ。

問3

① なんぢのおよぶところにあらざるなり。

② おのれにしかざるものとをともとするなけれ。

③ けもののおのれをおそれてにぐるをしらざるなり。

L2T
高2難関大国語



会員番号	
------	--

氏名	
----	--